STRIVE FOR 5

瀬戸SOLAN学園初等中等部
2026年度第５学年 学年通信
第６号 ５月11日発行

出し切った！１年生を迎えようプロジェクト

５月１日（金）に、「１年生を迎える会」が開催されました。誘導・司会進行・ゲーム企画のすべてを５年生が担い、下級生を引っ張る姿に、見守る教師たちは胸が熱くなりました。

このプロジェクトは、昨年度４年生の２月から始まりました。「１年生が安心して、楽しい気持ちで学校に通えるようになってほしい。」という願いのもと、子どもたちは限られた時間の中で役割を分担しながら準備を重ねてきました。また、子どもたちは２～４年生にも協力を依頼しました。各学年にウェルカムメッセージボードを書いてもらい、４年生には１年生への招待状を作成してもらいました。まさに、EAST棟のみんなで創り上げた会となりました。

迎える会の準備と並行して、子どもたち自身のアイデアから生まれた２つの企画も動いていました。ひとつは「１年生生活サポート」。

「１年生は初めてのことだらけで、何もわからないと思う。」という声からスタートし、１年生の担任の先生へのインタビューを経て、４月の初日から朝の準備と休み時間のサポートが始まりました。当番の日でなくとも率先して関わる姿や、次第に１年生が５年

交流イベントをがんばる５年生

生の教室へ遊びに来てくれるようになった場面など、１ヶ月にわたってさまざまなつながりが生まれました。

　もうひとつは「１年生×他学年交流イベント」。「１年生と他の学年が一緒に遊んだら、もっと仲良くなれるんじゃない？」というアイデアをきっかけに、昼休みを使った３日間のイベントが実現しました。かるたやだるまさんがころんだなどの遊びを通じて、学年を超えた交流が広がりました。自分の休み時間を３日間続けて使いながらも、最後までやりきった子どもたちの姿は、とても頼もしいものでした。

　そして迎えた当日。子どもたちは早めに会場に集まり、目を瞑って静かにこれまでの準備を振り返っていました。その眼差しからは、「やりきろう」という強い気持ちが伝わってきました。

整列をサポートする５年生

５年生と一緒に入場する１年生

　会が始まる10分前には、他学年の子どもたちが並び始めました。すでに列に入っている５年生たちは、自分のグループの子に声をかけながら場を整えていました。その頭上では、１年生誘導係がスタンバイ。廊下に並んだ１年生のそばで、入場のBGMをじっと待ちます。

司会を頑張る５年生　　みんなで静かになる練習

司会担当の子のハキハキとしたアナウンスとともに、会場が静まり返りました。さんぽのBGMが流れ、５年生に誘導された１年生が入場してきます。１年生の歩幅に合わせて、ゆっくり歩く５年生。途中、列が乱れて少しあわてる場面もありましたが、最後まで一生懸命に案内していました。

１年生のサポートをする５年生　　SOLANクイズを進める５年生

最初の歓迎企画はSOLANクイズです。ダジャレがかった問題で笑いを誘いながら、思わず正解が割れるような鋭い問題も交え、みんなを巻き込んでいく司会進行は見事なものでした。

続く歓迎ゲームでは、「どうしたら１年生が楽しめるか」を何度もぶつかり合いながら考えてきた３つのゲームを披露しました。練習を重ねたセリフが本番では思うように出てこなかった、と振り返る子もいました。それほど真剣に臨んでいたということでしょう。一生懸命な５年生の姿に引っ張られるように、会場全体が一緒に楽しもうとする雰囲気になっていきました。

会の最後には、隙間時間を使って手作りした紙のメダルをひとりひとりの１年生にプレゼントしました。様々な色のメダルを首にかけてもらった１年生が、笑顔で教室へ戻っていく姿が印象的でした。

会を終えた子どもたちの振り返りには、それぞれの言葉で綴られた達成感があふれていました。

「完璧にはいきませんでしたが、一年生は『楽しかった！』と言ってくれたので、とても嬉しかったです。

「少し大変でしたが、一年生の喜ぶのを見てようやく今までの努力が実を結んだと嬉しくなりました。」

「メダルを渡したときの一年生の笑顔が、印象に残っています。本当にこの会をやってよかったと思いました。」

「これまでやってきたことを出し切れたと思います。次回の一年生を迎える会、僕たちにやらせてください。」

「学年が変わっても頑張り続けたおかげで、たった45分で1年生を喜ばせることができました。このプロジェクトで学んだことは、他学年と関わることがとっても大事だということです。」

「来年の５年生にも、一年生を楽しませることができる迎える会を続けていってほしいです！」

一方で、「ゲームのルールがうまく伝わらなかった」「もっとわかりやすい説明にできたはずだ」と、冷静に課題を振り返る声も多くありました。一生懸命に取り組んだからこそ気づける失敗は、次につながる大切なステップです。

今回のプロジェクトで子どもたちが感じた手応えは、自分が何かを得ることで生まれるものではなく、誰かのために動き、自らが与える側になることで生まれるものだったと強く思っています。次のチーム探究では、このプロジェクト全体を振り返り、気づいたことや課題を言葉にしていきます。子どもたちがEAST棟の最高学年として、これからもたくましく歩んでいけるよう、引き続きサポートしてまいります。